

Newsletter of the British Council Japan Association

# BCJA Newsletter

No.2

September 30, 1994

## 夢を交換できるnewsletterに

Chairman of the BCJA 関谷 透

安東伸介前会長の後を受けて、今年4月から新しい会長に就任致しました。御高名な諸先輩が歴任された後で、私のような若輩者がBCJAの会長にとはおこがましい限りではありますが、2年間一所懸命やらせて戴きたいと思っております。皆様のご協力を宜しく申し上げます。

\* \* \*

私の母校であります東京慈恵会医科大学の前身は、明治の初め日本の医学教育がドイツを範として歩みはじめた頃、英国の教育方式を導入して開校された唯一の医学校でした。日本におけるドイツ流医学が「研究」を主な目的としたのに対し、英国流医学は「臨床」を重要視しました。英国で医学を学んだ慈恵医大の学祖高木兼寛の建学の精神は、「病気を診(み)ずして病人を診(み)よ。」でした。つまり、医学というものは、病に苦しむ人を救う事が第一の目的である、と考えたのでした。高木はその後海軍軍医総監にまで昇格しましたが、彼が海軍軍医時代に成し遂げた最大の業績は、海軍から脚気を撲滅したことでした。彼は脚気を、栄養の不足によって起こる病態、と考えたのでした。これは、脚気を細菌による感染症と考えた陸軍の軍医達との間に激しい意見の対立をもたらしました。しかし、彼は食事を改良することによって、当時国民病とまで言われた脚気を撲滅し、日本を日清・日露戦争の勝利国へと導く一つの要因を作ったのでした。彼の脚気撲滅に対する研究が発端となって、その後ビタミンが発見されました。高木兼寛は世界的には「ビタミン発見の祖」として知られており、南極には高木岬と名付けられた岬があります。

こういった事とはあまり関係ありませんが、私は子供の頃から漠然と、英国に行ってみたいと思っていました。保守的で、何となく陰気くさい感じのするところに共感を覚えていたのと、学生時代以降は、やはり、あのQueen's Englishに憧れていたのではないかと思います。そして、私が初めて英国に行ったのは1970年でした。学生の夏休みを利用して、40日あまりDurhamの近くの小さな町に滞在しました。今でもその地方の訛りを聞くと懐かしく感じますし、その時お世話になった家庭の人達と、今もおつき合っています。当時の英国の印象、初めて日本を外国から見た時の印象は、やはり強烈でした。この時の感動が、私をしてBritish Councilの試験を受けさせたのだと思っています。私がBritish Councilのawardを戴いて渡英をしたのは1980年でした。大学院を修了し、博士論文を終え、放射線科専門医資格を取得し、次の目標を「海外での医学研修」と定めていた矢先に、British Councilの試験の通知を目にしたのでした。

私は放射線診断学(今では放射線だけではなく、超音波や磁気も用いますから「画像診断学」と呼ばれるようになりました。)を専門にしていたので、英国でさらに深くこれを勉

強したいと考えるようになっていました。

まさかBritish Councilの試験に合格するとは思っていませんでしたが、落ちても恥にはならない、といったつもりで受ける事にしました。運良くawardを頂き、Edinburghで12週間の語学研修を終えた後、London郊外のRoyal Marsden Hospitalで10カ月間臨床研究に取り組む事ができました。しかし、これだけで帰国してしまっただけでは何か中途半端な感じがして、もう少し勉強が続けられないものかと考えた末、英国人と同じ様に職を探す事にしました。ここでもまた運が良く、Manchester大学の臨床研究員兼講師のポストを得ることができました。採用時の面接で、「君の甲状腺腫瘍の診断に関する論文を読んだことがあるよ。」と言われた事を思い出します。こうして、さらに2年間英国で勉強を続ける事ができ、この間に得られた経験は、今私の強固なbackboneとなっています。

帰国後、慌ただしく数年間が過ぎ、BCJAの委員に推薦して頂いた頃から、日本と英国の交流を深めるために何かできることはないものかと模索するようになりました。それには、自分の専門の分野から始めるのが基本と考え、日英放射線医学協会を設立しました。歩き始めたばかりの小さな組織で、まだ派手な活動はしていませんが、ここ3年間は毎年この協会を通して、日本の優れた放射線科医を英国放射線学会の教育講演に招待してもらっています。少しずつですが、両国の放射線科医の交流が深まっていくものと信じています。これに関する私の将来の夢は、両国の放射線学会で、お互いの優秀論文を毎年交換できるようにすることと、両国の若い、将来性のある放射線科医にお互いの施設で働く機会を与えることです。特に後者においては、British Councilの援助が必要となると思います。このような小さな試みを重ねる事によって、日英両国の相互理解が少しずつ進んでいくものと考えます。

ごく簡単ではありますが、思いつくままに所感と夢を述べて参りました。しかし、皆様の中にはもっと壮大でダイナミックな夢をお持ちの方が、沢山おいでだと確信いたします。その方々には、是非このnewsletterに夢を語って戴きたいと思えます。そして、その夢を現実に近付けるために、British Council、BCJA、そして会員一人一人が何をすればよいのか、を考えてみたいと思っております。皆様のご連絡をお待ちしております。

(SEKIYA Tohru, 杏雲堂病院 放射線科, Royal Marsden Hospital and University of Manchester, 1980 - 1983)



## ICHABOD

Richard Joscelyne

The books, out of their boxes at last, are stretched in long lines across the floor awaiting the carpenter's new shelving. They recall a lifetime of travel, interests taken and disarded, languages learned and now half-forgotten, meetings with university vice-chancellors, and local dignitaries at which glossy picture books of local beauty spots and artifacts are handed over with polite words of greeting and earnest expressions of continuing cooperation and friendship.

In sorting them into some kind of order I notice the gaps, the losses, the breakages: where is the second volume of the Olympic Press Edition of *Lolita*, bought to read on a long train journey from Geneva to South West France in the early summer of 1959; or the cover of an old Edition of our *Mutual Friend* bought in a second hand booksellers on the Christmas Shops in Bristol a few years earlier. Dog-eared copies of Portuguese, Spanish, Russian and Japanese grammars stare up at me sternly, accusing my stumbling attempts to learn the Portuguese subjunctive, the Russian verbs of going and carrying, or to progress in the accumulation of Chinese characters. Catalogues of exhibitions; theatre and concert programmes; guide books to the byways of Moscow, Madrid or Tokyo: memories of much earnest seeking out of the ancient or the beautiful and pathways into alien cultures; albums of photographs: who was that, where was that, what was that? Pictures of me with famous people: the Queen, Mrs Thatcher, Lord Home. Is that how I looked? How awful.

Next door are stacked the pictures waiting to be dusted, polished and hung; a view of Cambridge by John Piper bought with a five pound subscription as a university student; pictures bought in Montevideo in the 1960s; a compilation of industrial waste presented to me, as his masterwork, by an unofficial Russian painter over breakfast after an extremely drunken party in a Moscow dacha; a small Ben Nicholson bought with an inheritance from my Mother; a Mexican drawing bought from old Lewin in Palm Springs; and not least the beautiful prints given me so kindly and generously by my friends in the British Council Japan Association, now elegantly framed by a small shop in Samford Village.

Beyond the window, in the lake, the waterbirds fly and scud. Coots with chests of midnight blue rush across the field bobbing their white tail-feathers. In the evening flocks of egret, after a busy day picking the ticks from the cattle in the valley, swoop upon two scruffy trees at the end of the lake and hang there in dozens like Christmas candles. White cockatoos squawk and squabble or munch at the telephone wires. The hens pick and scratch their way through the garden, occasionally returning home to lay an egg.

Last week a news programme announced the beginning of winter although the sun still shines warmly through a cloudless sky. We sit outdoors with friends drinking wine and gossiping. We plan holidays, excursions, parties; unravel the mysteries of Australian Rules; take advice about snakes and spiders and other creatures which lurk somewhere in the undergrowth. We plan to buy sheep; plant vines or bananas; grow vegetables. Later, as the evening grows chilly, we gather around a log fire.

Ichabod? Surely not. The days pass carelessly and happily by. Enterprises are planned, discarded or forgotten. Ideas float and

hang in the air like the smoke from the bush fires on Mount Mee. The books, now orderly upon their shelves, mix the past with the present; that one I so long meant to read; now I shall.

(Richard Joscelyne, Former Hon. President of BCJA,  
Former Director. The British Council, Japan)

## バーネットさん再訪

出口保夫

## 英国留学の思い出

山脇百合子

一昨年、1992年の7月に、ブリティッシュ・カウンシルが日本に設立されて40周年の記念のお祝いパーティーが、その時のBC代表のJoscelyneご夫妻のお宅で催された。私たち同期のブリティッシュ・カウンシル留学同窓生もお招きいただいた。40年前の1952年は私たち同期留学生が渡英した年でもあるのだ。ということは私たち留学生の選抜が日本におけるブリティッシュ・カウンシルの初仕事であったということになる。

英国留学当時の様々の思い出が走馬燈のように脳裏を駆けめぐる。私は、4才と2才の2人の子供たちを残しての旅だったので、ホームシックにおそわれることもあった。

当時はまだセント・ポールあたりに爆撃のあとの瓦礫がそのままになっていたり、砂糖、キャンディーなど戦時中の配給制が続いているという有様だったが、英国には静かな戦勝国の落ちつきが漂っているのを感じた。

その頃、朝日新聞社のロンドン支店長をしていた椎野力氏に最近お会いしたが、椎野氏のお話によると、ロンドンに赴任された1951年は、日本の大使館も開いたばかりで、日本の代表的商社、新聞社、郵船会社など、ようやく支部を開き始めたばかりで、まだ日本としての活動は何も始まっていなかったと言われた。ロンドンに定住していた日本人はわずか7,8名だったということである。

まだ日本人不在だったイギリスに、私たち留学生は、長い船旅を終えて、急に飛び込んでいったのだ。不思議なことに、私たちはすぐに英国の雰囲気にとけ込み、仲間の留学生たちは、英国の学者と対等の立場に立って学問の発展に連なっていた様子を知ってとてもたのもしく思った。

一例をあげると、物理学者の宮島龍興氏は、逆に英国人学者相手にレクチャアをされているとも聞いた。日本からの送金は不可能な時代で、洋服など買う余裕はなく、宮島氏は下宿の主人からもらったという古い大きなオーバーを着ておられたが、英国人に見劣りすることは全然なかった。

私たち留学生仲間は、それぞれ専門は異なったが、各学界ですでに頭角を現し、世界的にも囑望されていた若き学徒だったのだ。私は、ひとりだけ専門が英文学なので、まず語学のハンディに悩んだが、英文学を深めるには、まず英国と英国人を知ることが第一と考えて、焦らず、リヴァプール大学大学院の生活を楽しむことができた。

現在でも世界的に著名なシェクスピア研究の権威、ケネス・ミュア教授が私のtutorになってくださり、現在英国小説研究でトップクラスで活躍しておられるミリアム・アロット教授にも親しく指導して頂く機会を得た。帰国して以来、今日まで、英文学研究の道を歩き続けているが、英国留学時代にあたえられた英国への深い親近感が今の私の生活の支えとなっている。

留学当時の思い出はかぎりない…。ホンコンでカーセージ号という大きな客船に乗りかえたときの豪華な船旅の雰囲気、シンガポール、アデン、ペナン、ボンベイ、ポートサイドと寄港地の珍しい見物…。しかし行きの船がペナンに着いたとき、留学生仲間のひとり佐藤さんが、いまだに全く原因不明でキャビンで縊死を遂げるといふ事件がおきた。私たち残りの9名の留学生たちの深い心のつながりはこのときから生まれたように思う。英国滞在中も何かにつけて集まったり、手紙を回覧したりして、消息を知らせあったり、励ましあったりした。

私たち、BC同窓生は、北海道、仙台、京都、神戸、東京と場所は離れているが、毎年あるいは隔年に集まって、たのしいひとときを過ごしている。「BC同窓会」と称して、今年は私たちの一番先輩で、医学界の大御所、脇坂行一教授が幹事役をかって出られ京都で開かれることになっている。

ロンドンで一度同窓会をとの熱心な声も出ている。渡英した翌年1953年はエリザベス女王の戴冠式の年で、街中お祭り騒ぎに湧きかえったロンドン…。さまざまな思い出をあたえてく

れた1952年-3年の英国生活... もう一度、同窓の方々とあの思い出の地で集まれたら、どんなに楽しいことだろう。(YAMAWAKI Yuriko, 実践女子大学名誉教授、University of Liverpool 1952-53)

## 1964年夏の航海 そして我がなつかしのシェフィールド

渡辺素子

先日学会の帰りに別府を通った時P&Oのかつての豪華客船オリアナ号が別府湾につながれていることを知り、さっそく2000円なりを払って船上の人となった。プリカン留学生として同じ会社の船で英国に旅したことを思い出したからである。公開されていた船室やサロンはしかし残念ながらあまりにも豪華すぎて我々の記憶の水面下のキャビンとは比べるすべもなかったが、デッキからの海の眺めは期待と不安を胸にした30年前の航海をその年月を一瞬に飛び越えて懐かしく思い出させてくれた。当時の感慨等を書き記してみる。思えば、私がいた大学院の研究室の教授も助手の一人も戦後の英国留学生でこの二人に朝に夕に『英国』の話の間かされた結果私は外国とは即ち英国なりと思い込んでしまい、大学院を卒業する頃には私の彼の国への憧れは病膏背に達していた。P&Oのオロンセイ号28000トンにのって1964年7月19日消防庁のプラスバンドに送られて胸ふくらませて横浜から出航することになったのはその結果であった。カルチャーショックという言葉の存在は知らなかったが港を離れた瞬間から始まった異国の生活はまさに驚きの連続であった。なにしろ当時は今のように情報過多な時代ではなかったのだ。出発前の慌ただしさから解放されて、窓のない4メートル四方位の4人船室に閉じ込められてささと船の案内を聞いた瞬間から驚きは始まった。『2等船客の方も夕食にはお召し替えなさいませ』『乗船日には正装をしないのが普通です』。夕食の為に召し替え！私には未知の世界であった。婦人達は確かに夕食に連日同じ服装で現れたことはなかった。翌朝は

6時頃インド人スチュワードのノックと共に真っ黒な紅茶のはいったポット、砂糖、ミルクの載ったトレイが部屋に現れた。同室の日本人は誰もどうということなのか知らなかった。真っ黒な紅茶はいくら砂糖を入れても渋くて結局は部屋の隅の流しに。英国式の金の勘定に戸惑い、暇な時間を持て余し、乗務員達が上司に回答する時のしゃちほこばった『イエスサー』に驚くうちに船は満月の台湾海峡を通り、デッキよりはるかに高いモンスーンのインド洋の大波との格闘を終えて波静かな紅海に入っていた。そして子供達が砂漠の岸にじっと立って船の往来を眺めている、意外に狭いスエズを通り地中海を経て実に36日目に錨を降ろしたティルベリーには初冬の冷たい霧がたちこめていた。やっと着いた！

しかしカルチャーショックはまだ延々と続いた。

ロンドンから指定された古めかしい列車に乗って牛や羊や灰色の家々が緑の野に点在する絵本のような田園風景に目を楽しませつつ3時間余り。目的地シェフィールドに着いてまず驚いたのは、駅舎を含めてあたりすべての建物が真っ黒であったこと。何もかも黒くペンキを塗るなんて何と悪趣味な！これが産業革命以来の石炭の煤煙の沈着の結果であると思ったのは大分後になってからである。真冬のように冷たい霧雨の中に緑の芝生と色鮮やかに咲き乱れる花が何かチグハグな不思議な雰囲気醸し出していた。大学は町の中心部と西の丘陵地帯に伸びる住宅地との境に散在していた。教授、リーダー、講師、学生の区別は、教授がアメリカ風の自由な人だと聞かされた私が籍を置いた研究室でさえ日本の大学に比べるとはるかに歴然としていた。トイレ、ティールーム、更衣室までテクニシャン用、スタッフ用、学生用に分かれており教授室にはトイレ、キチネットなどもついていた。スタッフは実験器具は自分では洗わないことになっていた。必要な薬品などは部屋で働いている多くは

テクニシャンスクールの子供の様なアルバイト学生に頼んで薬品庫から取って来てもらうシステムであった。ククロホルム100ccとか。めんどろになって1Lなどと注文するとチーフテクニシャンなる人が来て今日本当に1L必要なのかときく。ある日パキスタン留学生がヘキサンを注文しヘキセンが届けられて大爆発が起こった。

当地では夕食(ティー)は神聖な儀式で家庭でも学生寮でも大抵5時半頃。時間厳守。5時になると学生達がゼミの途中であっても当然のような顔ですっと席を立てて行くのが最初は異様にうつつた。夕方のラッシュアワーはこの町が都会であることを宣言していた。私の隣の実験台の学生はあまり勉強に身をいれず連日学生ユニオンでたっぴりと時間を過ごしていたが、ある日突然教授がやってきて『君は今年度でこの研究室を出て行くように』『イエスプロフェッサー』。これで両者の縁は切れた。我が母校の研究室を思い出しながらこれが英国式かなと考え込んでしまった。

British Councilがわりあててくれた食事つきの下宿は大学から歩いて15分。銀行員の主人と奥さんの老夫婦の外に交換学生のアメリカーナ女子学生とパキスタンの中年の役人も下宿していた。朝の卵をどうするかと聞かれて『ゆで卵』と答えたらなんと以後毎朝毎朝ゆで卵に直面することになった。当家の主人は判で押した様にベーコンアンドエッグスを食べていたからこれが変化を好まない英国人式かと納得したが、とにかく1カ月後には降参した。料理好きでいつも余分に(飛入りの客用に)料理を作るこの家の主婦は少々おせっかいな好人物で、タンスの引き出しの中まで整理してくれたり、英語で書いてあれば手紙だってちゃんと読んでくれていて『今週末のパーティーには』等と私をあわてさせた(内緒の物は鍵のかかる所にしまっておくものだと言った)。この土地の人である主人はおしゃべり好きで夕食時には人々の噂話の外によく歴史、特にこの地方の歴史を訛りの無い英語で得々と講釈した。私の英国史の知識は何しろ世界史の教科書の域をでなかつたし、おまけに英国人の名前は歴史上の人物も周囲に現存す人々もチャールズやヘンリー、ジェイムス、アンやエリザベスばかりで話の中で混線してしまい私は会話に加わる事ができずその分皿は速やかに空になって間をもてあましたりした。他の2人は熱心に傾聴して居た。この上なく楽しい好人物のこの2人との交友は、数年まえ2人が相次いで病没するまで頻繁な手紙の交換を通して楽しく続いた。最初にこの人達に出会ったことが私を英国大好きにした第一の原因だと思ふ。大学の中にはヨーロッパ風のクールな社会が支配していたが庶民の哲学の基本は

『nosy』であった。彼らの読む新聞は噂話であふれ、道を行くと家々の道路沿いの窓のカーテンがサラサラと動く。話し好きな話相手に飢えているのか。バス停も八百屋の店先での行列も、パーティーに縁の無い庶民の井戸端会議場であってうっかりすると見知らぬ人の子供の誕生日やらその人の隣人の噂まで聞かされることになる。『ローマ人の作った路は真っすぐだがこの辺りの路は羊が作ったから』というくねくねと曲がった道。冬には霧が路面で凍って危険この上ない坂の多いその道をくたびれたツイードのコートにスカーフの人々がたっぴりうつつむき加減に夏も冬も(夏でも寒い)天気の日も土砂降りの雨や雪の中も傘もささずに同じようにゆっくりと行く。西風と東風の出会うペニン山脈の麓のこの町は雨も霧も雪も多いが風も強く傘はあまり用をなさない。冬は橙色の街灯が消えるのは昼2、3時間だけ。この土地の灰色のスレートでつくられた塀や屋根のために一層モノクロ的に見える霧の町。人々は誰でも道で行き交う時お互いになっぴり笑う。目元でわずかにというのではなく口をバナナにして笑うのである。初めは本当に驚いた。概して路上で遊んでいる子供達は良家の子女ではないらしかつたが道を歩いていると彼らがやって来て、目尻に指を当てて、日本の子供達のやる『上がり目下がり目』の要領でチャイニーズ、ジャパニーズなどとやって見せる。このような中国人と日本人の見分け方があるとは知らなかった。クリスマス近く

になると行く手をさえぎって歌を歌い始める。『お金をやってはだめよ』と近くの主婦が注意してくれる。親切でおせっかいで、道を探ねると知らなくても教えてくれる。バスの車掌にこの番地に行くにはどこで降りたらよいかと尋ねたら近くに居た乗客達がここだ、あそこだ、とさわぎたてその結果とんでもないところで降ろされてしまった。

この町が好きになって結局3年余り住んだ。後半は大学の奨学金を貰って。シェフィールドはいろいろの意味で私の第二の故郷である。

(WATANABE Motoko, BCG研究所, University of Sheffield  
1964-67)

## 東洋と西洋の出会い

### ---オックスフォードの旧友たち---

広本勝也

エクセター出身のケートとヴェニス郊外生れのジョアンニ... 十年振りに東京で会う彼らは三十代初めで、活気にみちていた。ジョアンニはヨーク大学の講師となり、ケートは大型スーパーASDAのマネージャーになって、二人とも安定した暮らしを楽しんでいる様子。以前ケートは、黒を基調とした装いだった。が、今ではベージュのセーターとブルーのスパッツというように明るい地中海ふうのカラーで、イタリア人の夫君ジョアンニの影響がうかがわれる。

最近彼らはヨークとリーズの間に、18世紀後期の post- masters house を買ってマイホームにし、職場には、それぞれ自家用車で通っているとのこと。郵便馬車(carriage)が入るような車庫(barn)があり、historical heritageのある家で、かつてに改装できないが、内装を修繕する時には、市から助成金が出るそうだ。サン・ルーム(conservatory)もついていて、植物がよく育つらしい。

オックスフォード大学リナカ・コレッジで初めてケートに会ったとき、彼女は上流階級のうら若いレディーで、哲学を専攻し、M. Litt.の学位を取るためにヴィトゲンシュタインを主に研究していた。学生たちによって運営されるコレッジのバーで、彼女は時折り、カクテルを作ることもあり親しみやすい笑顔でみんなに人気があった。ジョアンニの方は、ガリ勉タイプ。いつも図書室に閉じ込めていることが多かったが、コモン・ルームで辞書を片手に新聞を読んでいる姿を見かけることがあった。当時、ケートとジョアンニは、多くの学生がそうであるように、独身の大学院生で、専攻もことばも違う二人が、どうして互いに心を引かれ合うようになったのか、私には不思議だった。いつしか彼らはgoing outを重ねるようになり、数年後、結婚にゴールインした時には、まだ共に学生だった。ジョアンニは経済学で学位を取ったあと、母国で仕事を見つけたかったらしいが、イタリアではコネがないと就職はむづかしい。イギリスなら実力次第で機会が開かれている。「試しに応募してみたら」とケートに勧められて、ジョアンニは、プリストル大学に当たってみたところ、幸運にもfull time lecturerの仕事を与えられた。その後、彼はランカスター大学そしてヨーク大学へ移ったが、今年の四月、文部省を通じて日本へやって来て、都内の某私立大学で4カ月間、教鞭を取るようになった、という。細君のケートも五月に3週間の休暇を取り、私と家内は、彼ら夫妻と再会することができたのだ。彼らを拙宅に招いた時、ケートはワインを飲むのをためらった。"I've got an exciting news of having a baby in November."と彼女は言い、jetlagで疲れていたその顔が、ぱっと明るく輝いた。アルコールを控えているのは、そのためだった。

ケートの滞在中、私たちは彼らと何度か会って、両国、浅草、等々力などを案内し、彼女の帰国の前日には、高尾山に登ることにした。

「イギリスで一番高い山ベン・ネヴィズは、1344メートル

だろう。この山は、ちょうどその半分ぐらいだ」と私は説明した。山道には、杉の太木で「オクトパスの足」を思わせるような根を生やしているのがあった。「ヘンリームーアの彫刻みたね」とケート。

シソの葉が群生している所では、イギリスのnettle(イラクサ)を思い出す。「イタリアではイラクサの若葉を食べるんだよ」とジョアンニ。

粘板岩の崖道に沿って、「夕紅葉下山の僧に語りかけ」の句碑があった。「このpoemの意味は何だい」と彼は聞く。

「チャールズ皇太子が植物に話しかけておられるのを、テレビで見たことがあるだろう？ 私共の国では、話しかけるのは植物の方で、人間はそのことばに耳を傾けるのさ」と私は答えた。高尾山には薬王院があり、自然と信仰と伝説が結びついている。天狗や稲荷や不動明王など、paganismにみちているが、彼らはそれをどのように受け止めたのだろうか。

「イギリスでも、キリスト教が民間信仰やケルトの伝説と混じり合っていることがあるのと同じようなものね」とケートが言った。

コーンウォール地方を歩いてみると、赤い帽子や緑の服を着た小妖精たちの絵や彫像があちこちに見られ、土着のフォークロアがその地方の生活の中に浸透していることが分かる。またケンブリッジシャー北東部のイーラー大聖堂には、屋根の浮彫り装飾に豊穡神グリーン・マンが、アダムとイヴに並んで彫られている。ヘリフォードシャーのあるカトリック教会でも、土偶のようなEarth Mother... 厚ぼったい広い口、垂れた乳房、大きい腰、短い足という母神像が壁に刻まれていて私はおもしろいと思ったのを覚えている。そして中世の絵には、聖なるキリストの像が、ギリシャ神話の好色な牧羊神パンと合体しているものもある。

日本人は宗教的に寛容で、神仏混交はその現われだと言われているがイギリスにもそれと類似する例がないわけではないようだ。

(HIROMOTO Katsya, 慶応義塾大学, University of Oxford  
1984-85)

## 日本人は英語が書けるか？

### ---言語構造に関する一考察

瀬川

彰久

英語教育改革に関する論議が近年盛んにおこなわれている。その骨子は、「日本人は英語の読み書きはできるが、聞く話すができない」から、これをなんとかしなければならぬ、というものである。私は、これは大きな誤解だと思う。「書くこともできない」。私はそう考える。

私の専門は解剖学で、語学ではない。このような生意気なことを書くことにためらいを感じる。けれども、英語を書かなければ研究論文の価値を認めてもらえず、また外国人研究者との交流もできない立場におかれている私は、これまで英語を誤解していたためずいぶんと時間を無駄にし、相手に失礼なことを書いてしまったという苦い経験がある。英語を書くというのは切実な問題であり、BCJAニューズレターが発刊されたのを幸い、投稿した次第である。

英語に関する誤解に、すくなくとも2つあると思う。「英語には敬語がない」という誤解と「英語が書ける」という誤解である。前者は手紙を書く時、後者は論文を書く時、それぞれ感じたことである。英語に敬語が存在し、それがコミュニケーションをつくりあげる上でたいへん重要であることは、英国に留学してみればただちにわかることで、皆様ご承知と思うのであえて本欄では議論せず、別の機会に考察してみたい。ここでは、われわれ日本人がどのような英語を書いているかを考察する。

論文を英語で書いて欧米に投稿すると、しばしば「native

speakerに英語をなおしてもらいなさい」という返事をもらう。きちんとnative speakerにみてもらって、文法の誤りはないはずなのに、そういうことがある。データに対するコメントならともかく、英語に文句をつけるというのは論文を通さないためのいいわけであり、これは日本人に対する人種差別である。と、本気で思ったことがあった。もちろん私の誤解である。アメリカの研究室を訪ねた時、「日本人とフランス人の書く英語はよく理解できない」という会話があった。その時、研究データや英語の文法以前に考えなければならないものがあることに気がついた。それが言語構造である。フランス語のことはよくわからないが、日本語なら毎日使っているから多少はわかるだろう。そう思って考えたことを述べてみたい。

英語で論文を書く時、私が気づいた最も大切なことは論理の連続性である。たとえば、「AはBである。BはCである。CはDである。よってAはDである」というように。当たり前ではないか、と思われるであろう。が、日本人はこれをどう書くか？「AはBである。BはCである。DはAである。よってCはDである」。おなじことを論じているのだが、後者はとても読みにくい。非論理的であるとすら感じてしまう。われわれが作文をなろう時、「起承転結」あるいは「序破急」ということを教わる。問題は「転」あるいは「破」の部分で、ここでいったん論理を飛躍させ、予後の「結」および「急」で本論にもどる。含蓄のある文章を書くコツがここにあり、さきほどの文章はそれを例示したものである。実は、学校で習わなくても、われわれは無意識のうちに「転」の多い文章を書く<sup>1)</sup>。「起承転結」といえばよいだろうか。だが、これを英語にすると論理が通じなくなる。英語は「起承承結」でなければならない。私は、ここで「だから日本語は非論理的言語である」というステレオタイプで、かつ誤った考えを述べようとは思っていない。日本語と英語がまったくちがう原理の上になりたつ言語であると言いたいのである。以下に考察を続けたい。

日本語の特徴は、「判断が、文の最後にくる」というところにある<sup>2)</sup>。長い修飾語のあとに主語や述語がくるし、それが肯定されるのか否定されるのかも最後まで読まないといけない。つまり、与えられた情報を蓄積して判断するようにできているらしい。これがセンテンスをこえてパラグラフ単位でもできるようだ。これを「含蓄型」理解とよびたい。これに対し、英語では読むはじから理解できるようにしなければならない。これを「逐次型」理解とよぼう。「逐次型」では、論理の連続性(論理内容そのものではない!)が厳密に要求される。日本語の「起承転結」は、「逐次」型理解になじまない。

情報を受け取る側から、今度は発信する側を考えてみよう。コンピュータの世界に、ランダム・アクセスとシークエンシャル・アクセスというのがある。ランダム・アクセスは情報をランダムにとりだせる形式であり、シークエンシャル・アクセスは時間的順序を追わないと情報をとりだせない形式である。ちょうど、CDとカセットテープのちがいである。日本語は、情報をランダム・アクセスで発信し、それを蓄積して理解するのにに対し、英語では、情報をシークエンシャル・アクセスで発信し、それを逐次的に理解するのではないか。これが私の言いたい結論である。

ここまで考えたとき、私は自分の英語がランダム・アクセス型で書いてあることに気がついた。これでは理解されるはずがないではないか。そして思った。英語はなんと融通がきかない

のだろう。

こうした違いがうまれる背景は一体なんだろう？私はさらに考えた。「絵画」的理解と「音楽」的理解のちがいでないか<sup>3)</sup>。絵画はランダム・アクセスの世界であり、音楽はシークエンシャル・アクセスの世界である。漢字は象形文字に代表されるように絵のような文字で意味を示し、英語はアルファベットをいかなる順序で並べるかで意味をあらわす。これがすべてではないと思うが、文字のもつ特性が言語構造を規定するおおきな要素であることは間違いないだろう。日本は、ここ数年急速に国際化が進展している。見知らぬ世界の人々が出会えば、当然誤解も生ずる。「日本人は論理的でない」というのも誤解だと私は思う。言語構造のちがいが誤解の原因だとすれば、それを明らかにする必要があろう。それがBritish Councilで学んだ私達の義務だと思うが、いかなるものだろう。

参考文献: 1)木下是雄: 理科系の作文技術 中央公論社

2)萩原朔太郎: 恋文から論文まで(丸谷才一編) 福武書店

3)養老孟司: 唯脳論 青土社

(SEGAWA Akihisa, 北里大学医学部, Imperial College, London 1989)

## 地名、人名の読み方は難しい

徳 永

純一

1964年7月19日、この年のBC scholar14名は“ORONSAY”号で横浜の大栈橋から勇躍(?)渡英の途についた。34日の長い航海の末、英国での生活が始まった。世界各国から集められたscholarのオリエンテーションも終り夫々の地に散ってゆく心細い気持であった。BCのAccommodation Bureauで止宿先のフラットの住所を頂き、地図とTubeの交通図を片手にFordwych Road 169を捜した。Marble Archから北へ延びるBakerloo線のKilburn駅から目的の家はすぐみつかった。2階の2間ずつを大家と分け、風呂、トイレは共用であった。家賃が手頃であったので直ぐに決めた。問題はタクシーで荷物を運び込む時に起こった。私の言う“Fordwych”の発音が通じない。2,3回繰り返した後、運転手は振り向いて私の持つメモを取り上げ、一言“OK”と言った後は無言のまま目的の家にピタリと迷わずに着けた。昔からWest Kensingtonは「上杉謙信」で通じると言う笑話があるが、舌を噛みそうな“Fordwych”には参った。「フォー」「ウイツ」あとは口の中でもごもごの方が通じたのかも知れない。Grosvenor, Leicester等々在英中「読んで字の如し」といかない地名の数々に出会った。タクシーの運ちゃんとのやり取りで英語に自信をなくした後だけにボスとの面会のappointmentの電話も通じることが不安であった。「Professor Seddonに会いたい」と言うと秘書は「Sir Herbertですね」と言った。不勉強と言えばそれまでであるが、日本では恩師の天児民和教授を「民和さん」と呼ぶようなものである。後に敬称Sirには直接surnameは付けない、またLordにはfirst nameは付けないことを知った。私の直接の指導者はAngus McPhersonである。彼の呼び方も「マックファーン

### 【原稿募集の

### お願い】

ニューズレター第3号  
の原稿を募集しております。  
締め切りは本年末頃ですので、  
会員の皆様のご協力をお願い

ン」と言うよりも極端に言えば「マックフィアソン」である。留学早々に地名と言い、名前の呼び方に面食らった一幕であった。ところで、医学の分野では最初に報告した人を敬して、その人の名前を冠した病名が少なくない。私の専門の整形外科でも例外ではない。Collies骨折というのがある。日常よく見られる手首の骨折である。彼自身はアイルランド人で1814年にこの骨折を報告している。日本では長くこれを「コレース」または「コレーズ」と呼んできた。これは「コルス」だと言う人もいる。最近、「コルス」に落ち着いているようであるが、果たしてこれでいいのか。論文で書く分には支障がないが、学会発表となると人名は正確に発音されねばならない。読みにくい名前を自国流に読み平然としている人もいる。アメリカ人の発表にまます。de Quervain(スイス人)病と言うのを平気で「デカヴェーン」と読むのはその一例である。McLaughlin 釘と言う骨折に使う釘がある。われわれは「マックローリン」と習ってきた。いやこれは「マックラフリン」だと言う人もいる。果たしていずれであろうか。最近、学会に來日したスコットランドのMacEachern先生本人は「マッカーチェン」だと言っていた。Tachdjian, Engh等はよく文献にでてくるがどう読むのであろうか。留学先の研究所の図書室に人名呼称辞典があった。同じ綴りでも幾通りもの読み方がある。なるべく本人に聞くことにしているが人名の読み方は難しいものである。最近では漢字でもその国の呼び方にするのが当然となっている。天気予報でも済州島を「チェジュ」と片仮名書きになっている。旧中山道を「イチニチジュウヤマミチ」と言ったアナウンサーがいた由、これを訂正した別のアナウンサーが「キュウナカヤマミチ」とした。笑い話のような作り話と思っていたら、この間、本人がテレビ対談で失敗談を話していた。我々も外国人の名前の読み方に同じようなミスをしているのではない。

(TOKUNAGA Junichi, 福岡整形外科病院副院長, Institute of Orthopaedics, University of London, 1964-65)

## British CouncilのTea Party

川島芳郎

この頃のように、このお米はまずいなどという上等なことはとても言っていられないほど食物にも不自由な日本から、一カ月半もかかって船でようやくロンドンについた頃の話である。最初の間は、まだ日本の大使館もなかった頃で、ロンドンにも日本の方はほんのわずしかおられなかった。私は、British Council Scholarでロンドンで勉強していたので、着いてから住む家のことをはじめ、British Councilには、いろいろお世話になった。その中で、今でも鮮やかに思い出すのは、英国に着いて間もない頃、たしか、British Councilのそれほど大きくない部屋で開かれたTea Partyのことである。着いてみるともう二十人くらいの方は来ておられたようで、入口に近く一人の品のいい年配の女性が立っておられた。私が部屋に入ろうとすると、やさしく微笑んで私の名前を聞かれる。それから私は紅茶をいただき、受皿ごと左手に持って、そのご婦人に導かれるままに、背の高い立派な紳士の前に行くと、ご婦人は「こちらは、川島さん、日本からの留学生です」といってからその紳士をちらと見て、「こちらは...」といって紹介して下さる。すると「ほう、日本から」と紳士は珍しそうに私に話しかけた。それを見届けるようにして、その人は姿を消した。慣れない英語で紳士の質問に答えていると、いつのまに飲んでしまったのか私の紅茶のカップは空になっていた。驚いたことに、相手の紳士はまだ紅茶をひとすずりしただけのようである。ふと見回すと、他のお客もまだみなみとした紅茶のカップを手をしている。「こんなに早く紅茶を飲み干してはいけないのか」と反省していると、先程のご婦人が銀のお盆に小さなクッキーをのせて現われ、私達にすすめる。紳士がどうするかと思って見ていると、二つほどつまんでカップの脇の受皿の上のせて、「

Thank you」という。私もその通りにする。ご婦人は、ちらと私のカップを見て、少しすると紅茶の容器をもってきて私の空のカップに紅茶をついで下さった。私はお礼をいいながら、ひそかに心の中で「この会がおわるまで、この一杯の紅茶をもたせなくてはいけない」とかたく自分に言いかけた。この紳士の知人が現われて「やあ」といって二人で挨拶をすませると、紳士は今度は私の方を向いて、「こちらは、」といってその友人の名前とその方の仕事を紹介し、それから私の名前と今までに話していた内容を要約して一言で彼の友人に紹介する。そうして、この会にいる間に、だんだんと話相手がふえてくる。それでも、ふっとひとりになってぼんやりしていると、例のご婦人が現われて、私を話の合いそうなお客様のところへ連れていって、紹介して下さる。ほんの二杯の紅茶で、こんな面白い会ができるのか、私はこの時の感動をそれ以来ずっと持ちつづけている。British Councilからは、この会だけでなく、「今度こういう会があるから行ってみませんか」というお誘いの手紙をよくいただいた。その手紙には、いつもSocial Function担当のNina Cooperというサインがあった。このNina Cooperさんのお手紙で、私は、次から次へと色々な会合に出席し、英国の家庭に招かれ、英国の人々と知り合う貴重な経験をあたえていただいた。Nina Cooperさんは、何度か事務所にお訪ねしたことがあったが、いつもやさしい、和やかな雰囲気があり、それでいて仕事はてきぱきしておられた様子であった。Nina Cooperさんのお手紙で私の行った会や家庭は実に様々である。その頃は、第二次大戦後まだ日が浅く、日本人も珍しいということもあったかもしれない。しかし、どの会に行っても、英国の人がとくに外国のお客様を上手にもてなす、もてなし方、そして、とくにもてなす心には魅惑された。英国が世界を支配していた伝統が、英国の人々の目にいつも世界を映しだしていたのだろうか。私も日本に帰ってから、わずかではあるけれども、英国でお世話になったことへのお返し的心もこめて、我が家に英国をはじめ色々な国の方をお招きしたり、またそういう会合をあちこちで開くことに努めている。日本も、世界の片隅にいた頃とは違って、今や世界の国々と深い関係を持ち、世界の人々と心を通わせることの必要な時期になってきた、などと考えていると、私は、いつもNina Cooperさんの誘ってくださった数々の集まりのことを思い描く。そして、今やこれは、私の宝となっている。それにしても、日本では当たり前になってきた豪華なパーティーとは別に、日本らしい簡素な「お茶の会」が工夫できないものであろうか。

(KAWASHIMA Yoshio, London School of Economics 1952-54)

## 1639年の天文観測を描いた2枚の絵画

木村精二

東京都の研修生としてイギリスに滞在していた半年間、ブリティッシュ・カウンシルの御世話で、地方都市を何回かまわることができた。マンチェスター市役所を訪ねたのもその一つで、1965年11月29日のことだった。R・オープンショウ行政官から同市の組織機構と人事行政の懇切な説明を受けたあと、庁舎内各セクションの案内をしていただいた。階上は中世の教会を思わせる重厚な造りで、市議会本会議場に通ずる広い通路だったろうか。その左右の二面は、奥行きが数メートルで上は高い天井まで届くような大きい壁面で構成されていた。美術に素養のない私は、どんな画家が何をテーマに描いたかあまり関心を持たずに通り過ぎようとして、ふと途中で歩みを止めた。窓際にセットされた望遠鏡から暗くした室内に丸い太陽像が投影され、それを驚きの表情で見つめる人物が描かれた1枚の絵に気づいたのだった。17世紀の初めガリレオらが太陽黒点を観測している類似の絵を天文書で記憶しているが、これも同時代にイギリスで活躍した学者の太陽観測の絵画だろうか。私は子供のころから天文を趣味としていたとはいえ、当時は天文史には関心が薄く、この絵のモノクロ写真を庁内の売店で買い求



めたあとには雑物と一緒に仕舞い込んですっかり忘れてしまった。話変わって今年は、横浜の桜木町駅近くに、1874年メキシコ遠征隊による金星太陽面経過観測の碑が建ってから満20年、これを記念して出版される小冊子に、私も小文を寄稿すべく、数カ月前から資料収集に取り掛かっている。歴史に関心を向けるのは、ある程度歳を重ねてからというが、私もその一人となった。予定しているテーマは、1世紀に1度か2度しか起こらないこの極めて稀な現象、地球の間である惑星の一つ金星が太陽の手前を数時間かかって横切るという天文現象を、正確に予報し、かつ世界で初めて観測したイギリスの若き天文アマチュアの業績である。時は1639年、人はプレストン近郊フル教会(Hoole Parish Church)の副牧師ジェレマイア・ホロックス(Jeremiah Horrocks)、それに彼の良き友人マンチェスター近くの洋服商ウィリアム・クラブトリー(William Crabtree)である。さきごろ私は、イギリスの友人から入手した一冊の文献を開いて、驚いた。「金星の太陽面経過を観測するクラブトリー、1880年ごろブラウン(Ford Maddox Brown)描く、マンチェスター市役所の壁画より」と説明のついた写真版が、そこに載っているのではないか。かつて見た壁画に違いない。29年前の記憶が蘇り、押入れの奥から例の写真を探し出したのである。物の本によれば、この画家は、1821年カレーに生まれ1893年ロンドンに没したイギリス人で、明るい色彩と写実的な技法によって歴史画・宗教画を描く。本の挿絵も描き、またステンドグラスも制作、主要作品は十数年を費やして完成した「作品」(1852-63)、マンチェスター市役所の12枚の壁画など、とあった。

この3月下旬、ごく短いイギリス行きするとき、丸1日を使ってホロックスが勤めたというフル教会とホロックス天文台を訪ねた。後者は、ホロックスと直接の関わりはないが、プレストン市が市民天文台を建設した時に、この若くして亡くなった偉人を讃えて命名したという。望遠鏡ドームの内壁に、牧師の服装をした人物が太陽を観察している小さい写真が留められているに気付いた。「1639年ホロックスによる金星太陽面経過の発見をクロウ(Eyre Crowe)描く、ウォーカー美術館(Walker Art Gallery)所蔵」というその説明をもとに、リヴァプールの同美術館あてに問い合わせをしたのは、帰国後の4月中旬のこと。同月末に届いた返信によると、収蔵してあるホロックス観測中の絵画のテーマは「英国天文学の創始者」、画家クロウは1824年ロンドンに生まれ同地で1910年没、同館には同じ画家によるほかの絵画はない。彼は、この絵の制作に先立ち、ホロックスが観測した家と伝えられるフル教会近くのカールハウス Carr Houseを訪ねて、室内の様子などを克明に調べた、という。ホロックスはリヴァプール近郊で生まれ、22歳という若さで同地に没した。その縁で、1891年この絵画はリヴァプールの美術館に寄託されたのであった。画家についてこのように的確なご返事だけでなく描かれた人物の天文学者ホロックスについても貴重な資料を送っていただいた。いつも経験することながら、見ず知らずのしかも遠方からの問い合わせに対しても、すぐに対応して下さる英国の公共機関のサービスの良さに敬服している。次の渡英の機会には、ウォーカー美術館(某文学案内書によるとリヴァプールで2つの大聖堂に次いで訪ねる価値のあるところといい、ある観光ガイドには、ロンドン以外でコレクションの豊富さはナンバーワン、と記してある)だけでなく、マンチェスター市役所を再訪して、両所に所蔵された金星太陽面経過観測の絵をはじめ、多くの名画も、じっくりと鑑賞してみたい、と願っている。国内と同じとっていいほどの気安さで、イギリスの旅を計画し、かつ実行できるのは、本当に有り難いと思う。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965.66.76)

## -はがき通信-

前略ご免下さい。1994年3月31日号No.1を昨日拝読させていただきました。パレット氏のメッセージ、他にブリカン学生の想いでの記事が沢山ありまして大変なつかしく思いました。これらのEssayが将来の日英(英日)関係をより一層改善して下さるよう心から祈りあげます。それにしても事務局の方々、そしてブリカンスタッフの数々のご援助がなければ、とてもNewsletterのみでなく日英関係そのものも成立しません。その意味では皆様各位のご協力を心からお願い申し上げる次第であります。次号がとても楽しく思います。大変おもしろく価値ある出版物の登場に心から拍手をお送りいたします。

(斉藤 努)

(他にも多くの反響が編集部によせられました)

## -はがき通信- 鹿児島近代医学と英国

野元正弘

鹿児島大学医学部の前身は鹿児島県立医学校で、これはWilliam Willisが創設した鹿児島医学校、赤倉病院を基礎として創立された。1837年北アイルランドに生まれたWilliam WillisはEdinburgh Universityで学位を受け、1861年英国大使館の医官として来日した。当時日本はMeiji revolutionのため激しい戦闘が各地で続いていたが、彼は敵味方の区別無く負傷者を治療した。戦功により東京医学校(現東京大学医学部)を主催した。しかし明治新政府はドイツからの近代医学の導入を決定したため、彼は西郷隆盛、大久保利通の招きで1867年12月に鹿児島へ移った。鹿児島では鹿児島医学校、赤倉病院長として医学教育、診療、公衆衛生の向上に力を尽くし日本医学の近代化に貢献した。その後William Willisの創設した医学校と病院は県立病院、県立医学専門学校となり、現在の鹿児島大学医学部へと発展した。鹿児島大学医学部ではWilliam Willisの功績を讃えるため、医学部玄関に彼のレリーフを作製している。

元英国駐日大使Sir Hugh Cotazziのsuggestionと鹿児島大学医学部名誉教授の佐藤八郎氏の尽力で1992年11月鹿児島日英協会が発足した。日本で15番目の日英協会である。現在430名の会員で、William Willisが活躍したためか医学関係者が多い。私は1984-1986にLondonのInstitute of PsychiatryのNeurologyにBritish Council Scholarとして赴任し、現在鹿児島大学医学部に勤めている。組織も私個人もUnited Kingdomとの縁が深く、英国の話が出ると力がいはい。

(NOMOTO Masahiro, 鹿児島大学医学部薬理学)

## BCJA九州支部便り

BCJA九州支部は1983年3月11日に当時のBC日本代表Mr. P.Martin、京都BC館長Mr. B. Griggsの出席を得まして設立総会を開催いたし、規約および役員を選出をおこないました。会長には権藤与志夫(当時九州大学教育学部教授、現中村学園大学教授)、副会長に徳永純一(福岡整形外科病院副院長)、書記、会計に望田研吾(当時九州大学教育学部助教授、現教授)が選出され、事務局を九州大学教育学部比較教育研究室に置くことが決定されました。ここ数年は、時折来福されますBC関係の方との懇談に、連絡の取れる者が集まる程度で支部の活動は休会状態であります。今回BCJA Newsletter発行の機会に九州在住のBCJA会員の皆様のご協力を得まして、九州支部の再建を計りたいと考えます。支部の活動、運営等ご意見をお寄せください。

連絡先: 〒812福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学教育学部  
比較教育研究室内 BCJA 九州支部事務局  
(電話: 092-641-1101 内線 3353)

(文責 徳永純一)

## ” プリティッシュ・カウンシル大阪事務所 ” 開設のお知らせ

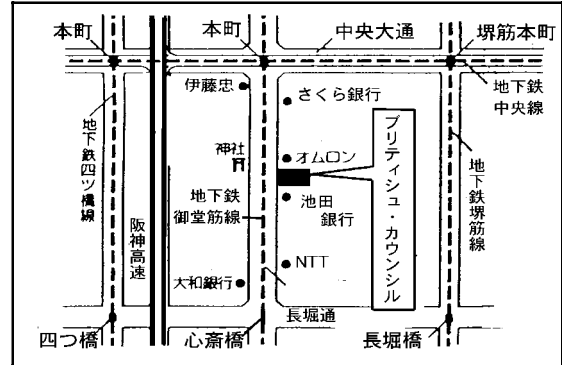
6月1日(水)にプリティッシュ・カウンシル大阪事務所がオープンしました。主な業務内容は、英国留学に関する資料の閲覧と簡単なお問い合わせにお答えします。講演会や映画会、展覧会なども時々行う予定です。留学相談も(予約制)行いますが、予約はプリティッシュ・カウンシル京都で受け付けます。

所在地 : 〒541 大阪市中央区博労町3-5-1  
セイコー大阪ビル19F  
Tel : 06-282-1984

開館時間 : 月曜日 金曜日 (除祝日)  
9:30-12:30, 14:00-17:00  
担当者 : 寺木通章 (7月1日付け)

なお、留学相談のご予約はプリティッシュ・カウンシル京都へ  
お願いします。

住所 : 〒606 京都市左京区北白川西町77  
Tel : 075-791-7151



### -Information-

『ももんが』に田中隆尚氏が「ろんどん好日」を連載中。購読ご希望の方は〒251 藤沢市鵜沼松岡3-17-23 田中隆尚氏にお問い合わせください。

毎年恒例のBCJA総会ならびにパーティーが11月18日(金)に行われます。こぞってご参加ください。詳細に関しましては、お知らせが届く予定です。